第1部　創作昔ばなし

常田富士男賞

お宝山

荻原　彰

昔、ある国に、ぐうたらな殿さまがおりました。

日照りや長雨により凶作がつづき、村人の暮らしは困窮していました。しかし、殿さまは村人のことにはかまわず、朝から酒を飲み、ごちそうを食べ、（おもしろいことはないものか）とばかり考えていました。

今日も、あれこれ考えていましたが、おなかがいっぱいになると、こっくりこっくり、居眠りをはじめました。

すると、お城に向かってどこからか一陣の風が吹き、殿さまは夢を見たのです。

――殿さまが治める国の真ん中に、「お宝山」という高い山がそびえていて、暮らしに疲れた村人が、山をめざして歩いているのです。

お宝山に何があるのか、だれも知りません。

とにかく、「山の頂上には『とてもいいもん』があるらしいぞ」という、うわさ話が広まったのです。

『とてもいいもん』がどんなものなのか、だれに聞いてもわかりません。そこで、村人は勝手に想像しました。

「きっと、お山の名前のとおり、お宝があるにちがいない」

「いやいや、ありがたい神様、仏様がおられて、願いごとをかなえてくれるのだ」

うわさ話にあやかろうと、ある人はこっそり、また、ある人は仲間と連れ立って、山をめざしました。しかし、歩けど歩けど、だれもお宝山の頂上にたどり着きません。朝早く家を出て、夕方まで登って、疲れきって帰ってくる始末です。

「どうして、たどり着かないのだろう」

みんな不思議に思いました。バカバカしいことだと、はなから相手にしない人もいました。うわさ話にまどわされている村人を心配する人もいま

した。
　そうこうしているうちに、山に登って『とてもいいもん』を見つけた人がいる、という話が聞こえてくるようになりました。
「へぇー、うらやましいなぁ」
「見つけたものって、いったい何だろう」
　いつの間にか、耳をかたむける人が多くなってきたのですが、見つけたという人に会った人も、『とてもいいもん』とやらを見た人も、だれもいません。
　うわさ話は、さらに活気づいて、
「とてもいいものなので、見つけた人はにこにこしているそうだよ」
　と、まことしやかに言う人まで現れ、みんな興味津々です。
「そんな人、どこにいるんだい」
「おらぁ、会ったことねえが、うわさだよ」
「いやぁ、うわさなんかじゃねぇ。にこにこしている人は、いっぱいいるよ」
　実際、村を歩くと、すれちがう人の中に、にこにこ笑顔の人が増えています。
　すると、あれあれ、村中だれもが笑顔になったのです。まるでみんなが『とてもいいもん』を見つけたかのように、にこにこしています。しかめっ面をしていると、自分だけが見つけられなかったようできまりが悪いのか、つい笑顔を装ってしまうのです。
　顔を合わせると、「こんちには」にこにこ、「毎日、暑いね」にこにこ、とまあこんな具合ですー。

　さて、お城では、先ほどから殿さまが居眠りの真っ最中。
　しばらくすると、お城に向かってまたもや風が吹き、〝よいしょ、よいしょ〟と子どもの声がして、殿さまは目を覚ましました。
「はて、子どもの声が聞こえたようだが、空耳かな……。さても、お宝山とは、おかしな夢を見たものじゃわい」
　大あくびをした殿さまは、夢を確かめるように、格子のすき間からまじまじと外を見ました。でも、そこにお宝山などあろうはずもなく、見慣れた風景が広がっているだけです。
（やはり夢だったか……）

殿さまは、つまらなさそうにごろり横になると、また眠ってしまいました。すると、夢のつづきを見たのです。

――夢のつづき中で、殿さまは、家来からお宝山のうわさ話を聞いています。

「おもしろそうな話じゃのう。わしも行ってみたいのう」

翌朝、殿さまはわくわくしながら馬に乗って出かけたのですが、不思議なことに、お城の門を出ないうちに山裾に着いてしまいました。

（しめしめ、こんなに早く着くなんて。馬に乗るまでもなかったわい）

けれども、お宝山の山道はとても険しく、そこから先は馬では行けません。殿さまは仕方なく馬を下り、「歩くのは疲れるのう」とぶつくさ言いながら、よっこらしょと登りはじめました。びっしょり汗をかいて登るのですが、なかなか頂上が見えてきません。

（おかしいな、もうだいぶ登ったはずなのに。頂上はまだかな）

そこで、一服しようと手ごろな石に腰をおろし、どれくらい登ったのか下を見たのです。

（あれぇ～）

殿さまはびっくりしました。朝、馬をつないだ山裾がすぐそこにあり、馬がのんびり草を食んでいます。こんなに汗をかいたのに、まだほとんど登っていなかったのです。どういうことなのか、さっぱりわかりません。

すると、〝よいしょ、よいしょ〟と、大きなかけ声が聞こえ、男の子が一人で山道を登って来るではありませんか。

「これ、お前は何をしに来たのか」

殿さまは、思わず呼び止めました。

男の子は答えます。

「おらぁ、『とてもいいもん』を見つけに来たんだい」

「ほほぉ、お前はそれがどんなものか知っておるのか」

「知らねぇよ。まだ、だれも見たことがねぇんだもの」

「では、『とてもいいもん』とやらは、本当にあるのか」

男の子は、

「山の上にそんなものありゃあしねえって、おとうも、おかあも、言っていたよ。それはここがじぃーんとしたときに、大切にそっとしまっておくものなんだ」
と、小さな手を胸に当てています。
殿さまは、（なかなか良いことを言うものじゃわい）と感心しましたが、「では、なぜさがすのだ」と、たずねました。
男の子は、
「おとうやおかあは、そう言ったけど、おらぁ、山の上に『とてもいいもん』があるって信じているんだ」
と、紺碧の空のように澄んだ目で、殿さまをじっと見つめるのです。
「もし、それがあったらどうするのだ」
「おらぁ……」
「おらぁ、何か」
「おとうは病気で寝ているし、おかあは苦労して働いている。だから、『とてもいいもん』を見つけて、おとうの薬がほしい。おかあも少しでも楽をさせてやりてぇ。それに……」
「それに？」
「苦労ばかりしている村のみんなを、助けてやりてぇ」
そう言い残すと、男の子は風の童子のように、山道をさっさと駆け上がって行ってしまいました。
（わしがいくら登っても、ちっとも進まないのに、どうしてあんなに早いのか）
しばらくポカーンとしていた殿さまですが、男の子の純真無垢な心根をすがすがしく思うのでした。
そして、自分のやっていることがはずかしくなり、（さて、もう帰るとするかのう）と立ち上がると、あれっ！　不思議なことに体がふわりと浮いて、殿さまはお宝山の頂上に立っているではありませんか。
頂上には、お宝らしきものは何もありません。とても見晴らしが良く、四方に風がわたっています。
村をながめると、仕事を終えて家路につく人や、子守をする子どもの姿が見えます。「また、あした」と手をふりながら、みんなにこにこ笑顔のはず……ですが……。

いえ、そんなふうには見えません。だれもかれも疲れきった様子で肩を落とし、重い足取りで歩いています。

（村人の笑顔は、どうしたのか）――。

夢が終わり、目を覚ました殿さまは、ハッ！としました。

いつの間にか、お城の天守閣に立って村をながめていたのです。夢の中で「お宝山の頂上」だと思っていた所は、実は「お城の天守閣」だったのでした。

殿さまは、「凶作で困りはてた村人が、あてのないうわさ話にすがるように暮らしている」という話を、以前、家来から聞いていたことを思い出しました。

（わしが浅はかだった。村人にとって『とてもいいもん』とは、良い政のことなのかもしれない。あの童子がわしを戒めてくれた……）

すっかり改心した殿さまは、すぐにお城の米蔵を開いて、村人たちに米を分け与えました。それからというもの、日照りや長雨に苦しむ村の治水に力を注ぐなど、村人の声に耳をかたむけました。

いつしか村には、本当の笑顔が満ちあふれるようになり、殿さまは「おらが国の、とてもいい殿さま」と慕われたということです。